ヒトは文化をもった生きものです。ヒトの生態は文化を抜きに語れませんし，
生態系は，自然と文化を包含するものと言えます。遺伝子で伝わらないものが文化だとすると，
それぞれがどのように伝わるかの比較のなかには，人間をトータルに考えるヒントがあるかもしれません。
ここでは，縄文時代の土器の変遷を詳細に追う研究から，
人工物の変化と生きものの変化を見比べてみます。

自然と人工

縄文土器の変化と生きものの変化

今村啓爾

縄文土器ほど形と装飾の変化に富む土器は世界でもまれである。その変化は，南北に長い日本列島で１万年を超える長い期間繰り返されたものであり，簡単に記述できるものではない。ところで，その地理的変化のありかたが生物の分布に似ていると聞いた。縄文土器は人が作った人工物であり，文化的現象として存在するものだから，DNAに記録された遺伝による生物の変異や分布とはまったく異なった原理で変化し分布するものである。それでもある種の類似性が認められるならそれはなぜであろうか。

話はさかのぼるが，明治10年，アメリカのモースが東京品川区の大森貝塚を発掘して多くの縄文土器を発見して以来，大正時代の中ごろまで約40年の間，縄文土器について多くの論文が書かれたのに，現在の視点で見るとそこには見るべき成果がないのである。その不毛の原因として指摘できるのは，そのころの研究が，土器を人の作ったものと意識するあまり，土器の細部に対し精密な検討を怠らせたことである。どうせ土器は人が作ったものだから，人ごとに違うものを作ったにちがいない。細部を気にしてもしかたがないという態度である。当時も遺跡ごとに出る土器に，雰囲気の違いのようなものがあることに気付き「○○式土器」という呼び名がつけられ始めていたのであるが，そのような違いは，製作した民族が違うからだと説明された。

縄文土器をアイヌ民族の製作物と決めつけ，弥生土器を大和民族の所産とし，縄文土器のうち大森貝塚の土器のような類を「薄手式」と名づけて，海岸地域の遺跡に多いから漁撈民族の土器とし，茨城県陸平貝塚の土器の類を「厚手式」と名づけ，中部高地など山岳地域に多いから狩猟民族の土器であると説明した。おおざっぱな把握と民族的担い手の違いを仮定することによって説明したつもりになっている間は，土器研究は進歩しなかったのである。

土器研究が着実な前進を開始したのは，東北大学地質学教室で古生物学を専門とした松本彦七郎の研究からであった。彼は土器を生物化石と同じものとみなし，その形や文様の微細な変化に至るまで進化的な意味のあるものと考え，貝塚遺跡の地層の重なりによって土器どうしの時間的前後関係を確認しながら，その変化の過程を追跡した。進化論の立場からの古生物学の研究方法を，土器という人工物にあてはめたのである。松本の方法を受け継いだ山内清男は，精力的に縄文土器の編年研究にとりくみ，土器の地域差と年代差を北海道から九州にわたって解明し，日本先史考古学の体系を確立した。このように，土器という人工物を生物のようにみなす人たちによって縄文土器の変化の過程が解明されたというのは興味深い。

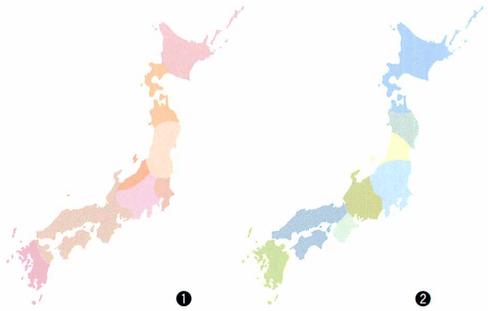
山内の縄文土器の理解のしかたをもっともよく示すのが「文様帯系統論」である。文様帯というのは土器に文様を加えるときの帯状画面のことである。縄文土器では文様は普通水平帯状の画面に加えられ，その文様帯は，土器によって１つのことも２つ，３つの場合もある。山内は文様帯が時間とともに拡大・収縮・分裂・融合・消滅する過程をもって，個々の文様の変化を超える，もっとも大きな根源的変化と認め，縄文土器全体の変化の過程がそこに集約されていると考えた。しかしわれわれはその壮大な構想に驚くとともに，その後飛躍的に増加した土器資料によって，彼の構想の細部を検討するときさまざまな矛盾が存在することを認めざるをえない。そしてその矛盾の原因をさぐっていくと，改めて人工物と生物との違いが見えてきた。

そもそも土器が一定地域で同じような形を有するのは，遺伝にたとえられる土器作りの縦の継承によるだけでなく，土器情報の共有――土器の形や文様，作り方を一定地域で同じように統一しようとする緊密な横の連絡関係――によって保たれているからなのである。文化は親から子に伝わるだけでなく，親子関係にない他人とも共有される。縄文土器にあっては，別の系統どうしが影響しあったり融合したりすることがある。たまたま似ている部分を対応する部分としてとりあつかう人が出てくると，そこで文様帯の系統関係がもつれるのである。

これまでにあげた土器の時間的変化以外にも，土器の変化が生物の変化に似た現象を示す場合がある。たとえば一地域の集団が衰退し人口が減少していくようなときに，ほかの地域の土器系統が入り込んで広がる現象がしばしばみられる。もちろん土器型式を担う集団そのものが消えていったのか，それとも衰退する集団が自分たちの流儀の土器作りを維持することがむずかしくなって，ほかの土器作りを受容するのかといった区別は，直接的にはできず，簡単にどちらといえないのが現状だが。

土器にも生存競争という考え方があてはまりそうだ。たとえばひとつの地域で何種類かの土器の作り分けが行なわれている場合，次の時期になると，面白い美しいものが人気を博して多く作られ，ほかのものがあまり作られなくなるという現象がある。美しさを淘汰の要因とする生存競争とも見えてくるわけだ。

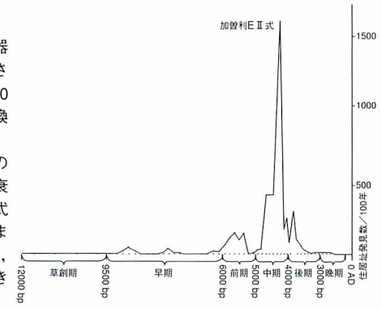
このような考えかたは，じつは私が最近試みはじめたばかりのことで，まだ学界で認知されたものではない。あたりまえのことだが，土器は生物ではない。しかし生物の変化のありかたを参考にすると，いろいろ土器の現象が理解できるのではないかと思っている。文化も普遍性と多様性の絡み合いの中で生まれるものであるわけで，この両者に眼を向けて，その時間的，空間的広がりを見ていくときに，生物の普遍と多様の関係に似たものが見えてくるのは当然かもしれない。



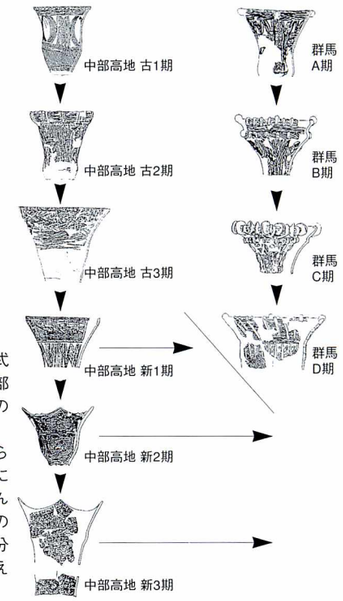
オサムシの分布と縄文土器の分布が似ている？中村副館長がその類似に驚いた。
❶縄文前～中期における土器文化圏の概念図。（渡辺誠1975より改変）
❷ミトコンドリア遺伝子ND5による日本列島のオサムシ（マイマイカブリ）の分類とその分布（現在）。

❸美は文化の伝播の選択的要素となるかもしれない。
（縄文中期深鉢・群馬県北橘村道訓前遺跡出土，北橘村教育委員会蔵）

いまむら・けいじ
1946年東京都生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科教授。東京大学文学部考古学科卒業後，同大大学院博士課程中退。文学部助教授，ロンドン大学考古学研究所客員教授，東大文学部教授などを経て現職。濱田青陵賞受賞。先史・古代土器系統の移動と系統間交渉の生態的・社会的背景を探る。縄文時代森林性新石器文化論を提唱。著書に『縄文の実像を求めて』（吉川弘文館）『富本銭と謎の銀銭』（小学館）など。



❹西南関東における土器型式（時代）ごとの発掘された竪穴住居址数（100年あたりののべ軒数に換算）。
縄文時代は，自然環境の変化に応じて集落の盛衰も激しかった。土器型式は激しく動く時期とあまり動かない時期があり，衰退している時期に動きが激しい。



❺縄文前期諸磯c式（時代）における中部高地の系統と群馬の系統。
安定している地域から衰退している地域に土器系統が入り込んで広がる例。従来の土器型式を細かく分けることによって見えてきた。